

慣性変化法によるマンツルの熱対流 シミュレーション

○ 竹山 浩介 (東工大)
斎藤貴之 (東工大), 牧野淳一郎 (神戸大)

概要

本研究では、マントル対流を陽解法で解くための新たな手法を提案する

1. マントル対流を陽解法で解くための新たなスキーム「慣性変化法」を開発した
2. 慣性変化法により過去のベンチマークテストと一致する結果を得た

慣性変化法(陽解法)

運動方程式

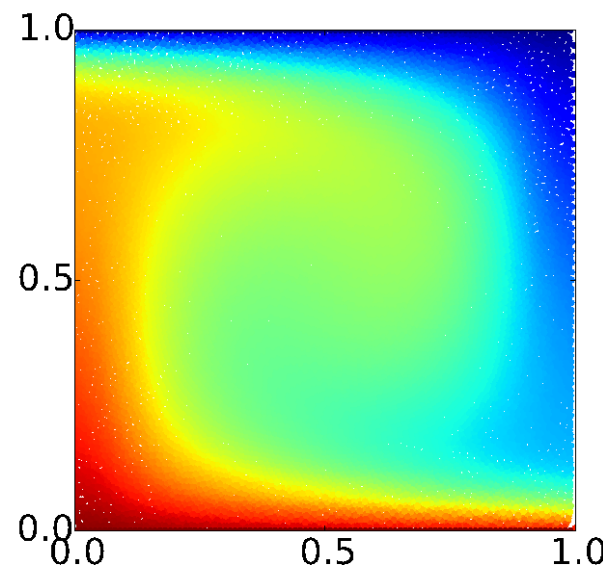
$$\frac{\xi \rho \frac{d\mathbf{v}}{dt}}{\text{慣性項}} = -\nabla p + \rho \mathbf{g} + \frac{1}{\chi} \nabla \cdot \mathbf{\Pi}$$

粘性

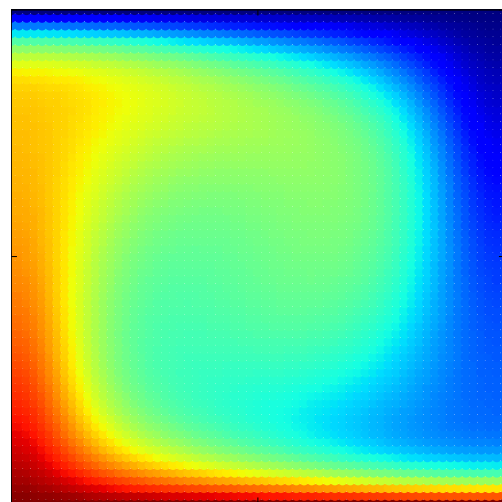
エネルギー方程式

$$\rho c_p \frac{dT}{dt} - \alpha T \frac{dp}{dt} = \frac{\chi \nabla \cdot (k \nabla T)}{\text{熱伝導}} + \frac{1}{\chi} (\mathbf{\Pi} \cdot \nabla) \cdot \mathbf{v}$$

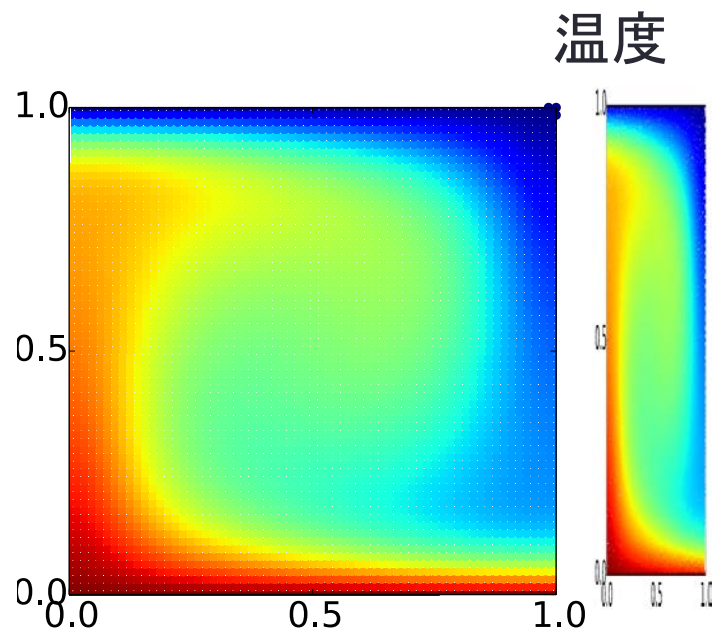
ベンチマークテスト



慣性変化法の結果
(SPH法)



慣性変化法の結果
(メッシュ法)



先行研究の結果
(ASPECT)

平均二乗速度・熱流量ともに先行研究の結果を再現出来た

まとめ

慣性変化法によって、マントル対流計算の陽解法化が可能

→ シミュレーションの高速化・高解像度化が可能

$$\xi \rho \frac{d\mathbf{v}}{dt} = -\nabla p + \rho \mathbf{g} + \frac{1}{\chi} \nabla \cdot \mathbf{\Pi}$$

$$\rho c_p \frac{dT}{dt} - \alpha T \frac{dp}{dt} = \chi \nabla \cdot (k \nabla T) + \frac{1}{\chi} (\mathbf{\Pi} \cdot \nabla) \cdot \mathbf{v}$$